

あま いふ

雨言

東雲八夫

彼は、強すぎるほどに、強い。焼き尽くされてしまうほどに、熱い。でも、目は、涼しい。燃えているのに、冷たい。まるで、自分で自分を傷つけているように見える。

私は、何を信じたらいいのだろう。彼を、守れるなら、何だって、かまわない。それなのに、私は、何を信じたらいいのか、分からない。

きっと、あなたの言う世界とは、あなたが生きている世界のことではないのでしょうか。遠くの世界の出来事だから、そんなことが、言える。あなたは、そんな世界を全部、かき集めて、これこそが世界だと、言い張る。

私の世界は、そこにはない。

大事だから、守りたい。彼女の胸の中に、いつも残る言葉だ。それでも、心は、ゆれる。

最後まで、彼は自分を守ろうとしていた。

誰かが、肩にぶつかった。彼女の傘は、地に落ちた。こんなにも、ちっぽけ。弱い。彼が、いたから、今、私はここにいる。

一人に、なる。私は、彼の守りたかったものを、守れるだろうか。そんなに、強くはない。

彼女は、振り向いた。まつ毛の上ののっていた、雨が、飛んだ。

全てを、捨てる。彼女は、そう、思った。燃えろ。果てろ。消えろ。砕けろ。滅びろ。

静寂の膜が、彼女を包む。目を、閉じていた。ゆっくり、開く。

変わらずに、そこにある。ひとつだけ、残っている。彼女は、駆け出した。飛んだ。彼女の、世界。光も、闇も、その中にある。触れた。やはり、冷たい。包まれた。

もう一つ、残されていた。言葉。大事だから、守りたい。もう、何も無い。だから、彼女は、迷わない。